

まゆしいエンドからでも、「シュタインズゲート」に到達できると信じる者達に捧ぐ

ラボのドアを開けると、昼間の日差しを受けて暖まった室内の空気が岡部の身体にまとわりつく。

玄関に脱ぎ捨てられた、小さなサイズの女物の靴。

「一番乗りとは実に熱心なことだな、まゆりよ」

ひと目見るだけで幼なじみの——そして、いまは自分の恋人でもある——彼女のものだとかわかるその靴に目をやり、居るはずのまゆりに声をかけながら岡部はラボに足を踏み入れる。

だが、いつもの指定席のソファアの上にはまゆりの通学鞆だけが放り出されているだけだ。

振り向けば、ほこりっぽい開発室に置かれたパソコンの前に学校の制服のままのまゆりの姿はあった。ヘッドホンをかぶり、背筋を伸ばして微動だにせずまゆりはパソコンの画面を見つめている。

ディスプレイになが映っているかはまゆりの身体に遮られて見えない。定期的にマウスをクリックする音だけが開発室の中に響く。

「まゆりよ、何をしているのだ……?」

おおかたコスプレ衣装の通販サイトでも見ているのか、それともフレパの日記でも書いているのか。

軽い気持ちで近づいた岡部は、肩越しにのぞいた画面を前に固まった。

まゆりがプレイしていたのは、いわゆるノベルゲーム——岡部の理解するところで言えば、エロゲーに類するゲームだった。

ウィンドウ下に配置されたテキストウィンドウに台詞が並び、紙芝居のごとく表示されたキャラクターのバストアップの画像が表情を変える。

ダルがこのパソコンでプレイしているのを何度も見たからの形式はもはや見なれたものだった。だが、何故いま、まゆりがそれを?

『——、俺は、おまえのことを、ずっと前から……』

ウィンドウの中では見目麗しい少年——ゲームの主人公だろうか?——が、愛の告白をするところだった。

まゆりのクリックで画面いっぱいイベント絵が表示され、ウィンドウの中で可愛らしい少女と先ほどの少年が抱きしめあい、キスを交わす。

こういう光景は何度も見たことがある。ただし、ダルがプレイしているのを横目で眺めてだが。

ヘッドホンをし、ゲームに没頭するまゆりは後ろに立つ岡部に気づかない。まばたきもせず淡々とクリックを繰り返し、まゆりはゲームを進めていく。

ダルのプレイを眺めた、いや、無理矢理見せられた経験からすると、こういった告白シーンのあとには決まって濡れ場が入っているものだった。

画面の中では心を通わせた少年と少女が幸せそうに言葉を交わし、再びキスをする。まゆりのクリックの音と、岡部が固唾をのむ音だけがだけ静まりかえったラボに響く。

「はあ、やっと着いた…… なによこの暑さ、もう九月の末よね？　なんでこう日本の夏はいつまでも続くのかしら……」

「まあ仕方ないっしょ。地球温暖化とか言うし」

ドアの開く音と、うんざりしたような声。紅莉栖とダルが表れたことで、岡部の呪縛が解ける。

「あれ、何してるの？　あなたたち」

抱えていた荷物を談話室に置いた紅莉栖が、岡部とまゆりに気づいて声を上げる。何気なくパソコンのモニターを覗き込むと近づいてくる彼女に、岡部はとっさにまゆりの後ろから手を伸ばしてゲームを終了してしまう。

「ひゃっ……」

突然の行為に、まゆりが驚いた声を上げる。

「……あー、そういうこと」

背中越しに手の上からマウスを握り無理矢理ゲームを終了させたので、岡部は半ばまゆりに覆い被さるようなかたちになる。二人で一つのマウスを握る岡部たちを前に、わずかに頬を赤らめた紅莉栖はなにか納得するように一人であなずく。

「どうやらお邪魔だったみたいね。ごめんなさい」

「おい助手よ、おまえはなにか誤解しているぞ!!」

岡部の反論に答えず、紅莉栖はそのまま無言で肩をすくめると談話室に戻っていった。

「まゆり、いまのゲームは……」

椅子に座ったままのまゆりが、無言のまま恨みがましい目で

岡部を見上げる。ついぞ目にしたことのなかったその表情に腰の引けた岡部は言葉尻を濁す。

「……………」

岡部が何も言えないでいる間に、勢いよく立ち上がり、まゆりは紅莉栖を追って開発室をあとにする。

「あ、まゆり氏、賞味期限が怪しくなってるやつがあるからそれから食べたほうがいいお」

冷蔵庫から揚げを取り出そうとするまゆりにダルが声をかける。無言であなずくと、まゆりは電子レンジから揚げを温め出す。

電子レンジの庫内ライトに照らされてから揚げがぐるぐると回る。もうなにも起こらないはずなのに、その光景を見るたびに岡部は奇妙な郷愁を覚える。

「オカリン、パソコン使ってる？　僕もあとでちよつとやることあるから、終わったら教えてよ」

「あ、ああ」

パソコンの前に立っていた岡部のことを勘違いしたのか、まゆりがいなくなったのと入れ替わりにやってきたダルが声をかけた。

「そういえばダルよ。ラボのパソコンはあくまでも未来ガジェット研究所の開発機材なのだ。誰の目にもつくようにエロゲーをインストールをしたりするのはやめろ。誰かが起動したらどうする」

声を潜め、ダルに釘を刺す。先ほどまゆりがプレイしていたゲームは、どうせダルが入れたものなんだろう。

「……オカリン、僕をなんだと思ってるんだお。いくらなにでもそこまで恥知らずじゃないお」

その手の起動ショートカットは全部ここに隠してあるお、とダルがデスクトップの『数学課題』と名付けられたフォルダを開く。確かにその中には色とりどりの女の子のアイコンが並んでいた。

「ダルよ、なぜそんなフォルダ名に……」

「エロいものは『数学課題』フォルダに入れるのは決まりだろ常識的に考えて」

なぜか得意気に胸を張り、ダルは談話室へ戻っていった。

つられて談話室に目をやれば、ソファーに場所を移したまゆりはから揚げをほくつきながら膝の上に広げた雑誌に目を落としていた。

たしかあれはまゆりが毎月欠かさず買っているコスプレヤーの雑誌だ。ついこの間衣装を完成させたばかりだというのに、もう次の新作の構想でも練っているのだろうか。相変わらず熱心なことだ。

だからこそ、岡部の心について先ほど見た光景が引つかかる。

まゆりがラボでパソコンを使うことはほとんどない。ましてや、ここでゲームをすることなど。

つつきりダルがインストールしたゲームを間違って起動でも

したのかと思っていたがそうではないようだ。それでは、いったいあれは……？

疑問を解決すべく、岡部はラボのパソコンの内部をあさることにした。あたかも次なる未来ガジェット用の資料調達のために通販サイトを開いているかのようにブラウザを表示しながらも、岡部の目はパソコン内のファイルをくまなくチェックしていく。

「なんだ、これは……？」

“mayncy” すなわち——「まゆしい」

いつのまにか見たことのないフォルダが作成されているのを岡部は見つける。談話室の皆に気づかれぬように注意しながらそのフォルダを開けば、中にはダルの「数学課題」フォルダにあるものと似たゲームの起動ショートカットらしきものが一つだけ入っていた。

さすがにゲームを起動するわけにもいかず、岡部はショートカットの名前——ゲームのタイトルを検索する。

「女性向け、ゲーム……？」

乙女ゲー、とも言う。そういうものがあると、どこかで聞きかじった知識だけはあった。だが、実際に公式サイトを見たたりするのは初めてだ。

さきほどまゆりがプレイしていたゲームに出ていた美少年が攻略キャラクターの一人として紹介されているのを眺め、岡部はうなり声をもらす。男だからエロゲーの主人公だとばかり

思っていたが、あれはエロゲーとは男女逆だったのか。

「ダル、もう使っていないぞ」

椅子から立ち上がり振り向いた岡部の視線が、ちょうど顔を上げたまゆりと合う。

「……………」

ふんわりと優しい、いつものほほえみを返してくれるはずのまゆりは、無言で視線を手元の雑誌に落とした。

*

『幸せに、してください………… 離さないで、ください。ずっと大好きで、いさせてください…………』

もうなくなってしまう世界線だけれど、そこでまゆりに告げられた言葉は永遠に忘れない。忘れては、いけない。

『まゆり、あなたは、幸せになりなさい』

あのとき、一度は紅莉栖を切り捨ててまゆりを選んだはずだった。

…………だが、結局のところ、あの世界線にも安住することはできなかつた。

一見すると抜けているようであり、まゆりは非常に察しがいい。心の奥底に紅莉栖を切り捨てたことへの後悔を抱いたまま、まゆりと恋人として関係を続けることにはどだい無理だった。

『オカリン、ちゃんとまゆしいを見て。いまのオカリンの彼女は、まゆしいなんだよ？ オカリンは、いつもまゆしいを通して誰かを見る』

だから、そうやってまゆりから指摘されたとき、救いを覚えなかつたと言われたら嘘になる。

『もしかしたらそれ、まゆしいに幸せになりなさいって言ってくれた神様なのかな？ 残念だな、神様だったら、まゆしいには勝ち目ないや』

泣き笑いを浮かべながら幼なじみから告げられた言葉が、再びタイムマシンへの情熱をよみがえらせてくれた。

世界に殺され続けたまゆりを救うことだってできたのだ。そこにあと一人、救われる人間を加えることが出来ないはずがないのだ。

そして、まるでそうやってタイムマシンの研究を再開すること自体が、なにかの鍵だったとでも言うかのように。

再びやってきた、だが以前とは違う世界線の鈴羽。あきらかになる中鉢の本性。未来からのムービーメール。

『最初の俺を、騙せ』